

新型コロナワクチンの追加接種意図に関わる要因の検討

NGUYEN PHUONG ANH

【背景】 2022年2月時点は、新型コロナワクチン追加接種(3回目)の大規模な接種が間もなく開始されるタイミングだったが、日本国内に住んでいる3回目接種の対象者の追加接種意図やそれに影響しうる変数についてはほとんど知られていなかった。そこで、当時の接種意図やそれに影響を与える要因を検討するため、オンライン調査を行った。

【方法】 オンラインサービス調査である Questant 社のモニター登録者 1122 名に対し、2022 年 2 月 16 日から 17 日にかけてオンライン調査を実施した。対象外および回答不備の回答者を除外し、最終的に 952 名(男性 596 名(62.61%), 女性は 356 名(37.39%))のデータ分析を行った。調査票では、年齢、性別などの個人属性情報、本人と周囲の感染状況、初回接種(1・2 回目ワクチン接種)の体験、心理的特性、ワクチンリテラシー、新型コロナ感染症への意識とワクチン追加接種に関する諸意識について尋ねた。

【結果・考察】 作成した調査票の因子構造を調べるため、探索的因子分析を用いた。その結果、従属変数であるワクチン追加接種意図 1 因子と接種意図に影響すると考えられる初回接種の体験 2 因子、ワクチンリテラシー 2 因子、心理的特性 6 因子、感染症への認識 3 因子やワクチン追加接種への認識 4 因子、合計 18 因子が得られた。具体的には、初回接種の体験について、「初回接種の受けやすさ」と「初回接種時の副反応の強さ」の 2 因子、ワクチンリテラシーについて、ワクチンの情報を主体的に入手する能力の「伝達的ワクチンリテラシー」とワクチンの情報を批判的に分析し、活用する能力の「批判的ワクチンリテラシー」(Biasio et al., 2021)の 2 因子が得られた。また、心理的特性について、日常でのリスクテイキング傾向の 4 因子と「集団主義意識」や「自分の健康状態への自信」の 2 因子が抽出できた。日常的リスクテイキング傾向について、森泉他(2010)で報告された通り、個人のギャンブル傾向を示す「ギャンブル志向性」、状況に左右されるような行動に対するリスク傾向を示す「状況的敢行性」、状況に依存せずに個人的の一貫した信念等に基づいた行動に対するリスク傾向を表す「確信的敢行性」と、防犯や安全への配慮を伴う行動を示す「安全性配慮」の 4 因子が得られた。新型コロナ感染症への認識について、「自分の重大性への認識」、「周囲の重大性への認識」、「自分の罹患可能性への認識」の 3 因子が抽出された。最後に、ワクチン追加接種への認識について、「追加接種の利益への認識」、「追加接種の安全性への不安」、「ワクチンや医療機関の利便性への意識」、「フリーライディング可能性」の 4 因子が得られた。

次に、個人属性別の追加接種意図を調べるため、一元配置分散分析を行った結果、年配者、男性、一度は結婚したことがある人、同居人がいる人、妊娠中・授乳中・妊娠の計画中ではない人、基礎疾患を持つ人ほど、接種意図が高いことが明らかになった。また、年代別の追加接種意図を見れば、20 代の接種意図が最も低いことも明らかになった。

最後に、追加接種意図とその他の要因の関係性を検討するため、共分散構造分析 (SEM)を行った。その結果、接種意図を促進する要因は、追加接種の利益への認識、周囲の重大性への認識、年齢と確信的敢行性であった。それに対し、接種意図を低下させる要因は、フリーライディング可能性や追加接種の安全性への不安であった。その中でも、フリーライディング可能性が、接種意向に最も影響力がある要因であった。また、フリーライディング可能性が高い人は若者、確信的敢行性と安全性配慮が高い人、初回接種で強い副反応を経験した人であることがわかった。それにより、周りの早期接種を期待するフリーライダーが追加接種普及の大きな壁になると考えられ、そうした可能性が高い人々に対して、早い段階からこの考え方をなくす方法を考える必要があることが示唆された。(安全行動学)